

「少女像」設置への妨害活動が撒いた種

池永記代美(ベルリン・女の会)

ドイツでは、フライブルク市(2016年、『wamだより』34号参照)やヴィーゼント村(2017年、同36号参照)に続いて2018年も、「少女像」の設置に関して在独日本公館の妨害活動がありました。

ボンの女性博物館で

介入を受けたのは、ボン市にある女性博物館です。同館は在独韓国系団体との出会いをきっかけに、「少女像」の設置及び関連するテーマの美術展やシンポジウムを企画しました。同館のピーツェン館長は、この企画によって戦時性暴力がアクチュアルな問題であることをドイツ社会に喚起したいと考えたといえます。

芸術作品である「少女像」を博物館に展示するのは極めて真っ当なアイデアです。ところがそれを察知した在デュッセルドルフ日本総領事館は、像の設置計画を中止するよう同館に求めました。ピーツェン館長がそれを拒否すると、領事館側はボン市に、博物館、市当局、領事館による三者会談を開くよう要請、6月下旬に行われた会談で領事館は「像を設置するな」と繰り返すばかりで、内容のある話はまったくできなかったといえます。

ボン市の対応も不甲斐ないもので、博物館が性暴力と取り組むことは歓迎するが、「慰安婦」問題は複雑で、像をボンに設置しても問題解決に有益な議論につながらないと判断。ボン市から家賃補助を受けている同館は計画を押し通せず、2018年8月、「戦争と危機における女性への暴力反対」と題した美術展と国際シンポジウムは予定通り行われたものの、像の設置は見送られたのでした。

像の設置に関しては、多くの日本企業が進出しているデュッセルドルフなどの邦人社会の一部からも反対の声が上がりました。この像は日本を「おとしめることを目的とし」、「像の設置により地元の様々な国籍やルーツを持つ住民同士の対立や諍いが発生するのではないかとの不安も生じている」と、ボン市長に「適切な措置」を求める請願書が出回り、7月中旬、314筆の署名がボン市長に提出されたのです。ここで用いられたのは米国などの像設置反対派の言説ですが、そのような対立や諍いが実際には起きていないことには触れていません。ホロコーストの犠牲者を追悼する記念碑のせいで、世界のどこかの町でドイツ人がいじめられた話などもないことを思うと、全く馬鹿げた主張です。しかし呼びかけ人の1人は、一個人としての行動としながら自分の所属団体の名前を出し、社内や知り合いの日本人に広めて欲しいと依頼しており、この

ような意見が今後も組織的に広められれば、ドイツの自治体などへの圧力になりかねません。



1981年、女性博物館として世界で初めて誕生したボン女性博物館。民間の博物館で、350人のメンバーを擁する博物館協会が運営する。

ハンブルクの芸術プロジェクトで

ボンでの設置が見送られた「少女像」は、8月14日、ハンブルクにあるルター派教会に属するドロテー・ゼレ・ハウスの入口ホールに、突然、出現しました。像の展示を企画したのは、前述の在独韓国系団体の芸術責任者と、教会系の「芸術の家」の責任者の2人のドイツ人男性でした。驚いた在ハンブルク日本総領事館は、即座に像の撤去を求めましたが、2人は展示に不満があるなら領事館の言い分を書いた文書を像に並べて掲示することを提案し、さらに性奴隷という言葉に異議があるなら、「慰安婦」はなぜ性奴隷でないとと言えるのか証明するよう求めたそうですが、領事館からは返事がなく、予定していた9月30日まで像の展示は続けられました。展示の場が教会の所有する建物であり、教会という大きなバックボーンがあったことが、成功の要因だったと思われます。

ハンブルクで展示された像の今の所在はわかりませんが、またある日突然、ドイツのどこかの町に出現するかもしれません。そしてボンの女性博物館も目下、「身近な場所や世界における女性に対する暴力を警告する碑」のコンペ

参加作品を募集しています(4月14日まで)。選ばれた作品は今年の11月25日、女性に対する暴力撤廃国際デーに同博物館に設置される予定とのこと。日本政府側の執拗な妨害活動は、ドイツ社会が「慰安婦」問題や性暴力の問題と新たに取り組むきっかけを作ってくれたようです。



ハンブルクに展示された「少女像」。9月5日には、「少女像」と「慰安婦」問題についての講演会も行われた。©Punggyeong